

「通訳訓練法」を利用した大学での英語教育の実際と問題点

田中 深雪
(立教大学)

As the interest toward incorporating communicative approach to foreign language teaching increased among EFL instructions in Japan, there has been a steady increase of the number of universities that have started teaching interpretation classes as part of their language programs. Since the field of interpreting training is rather new compared to the traditional EFL instruction, there is considerable amount of confusions and misunderstandings among educators in terms of methodologies, evaluations, adequate class sizes and even to qualification of instructors. This paper is a case report of one of those interpretation classes at a university in Japan. After three months of study, students responded to the questionnaires. The results revealed that there are several pedagogical issues that need to be addressed when teaching interpretation classes. The paper concludes with practical suggestions to seek breakthroughs to some of the issues concerning teaching interpreting at undergraduate level in Japan.

1 はじめに

英語教育の現場で、コミュニケーションに重点を置く指導が盛んになるにつれ、通訳教育や通訳教育を利用した語学教育を実施している大学や短大の数は増加している (田中 2002)。大学では、民間の通訳スクールのように、純粋に通訳者養成をめざすというよりは、一般の英語教育の一環として通訳訓練を行う傾向 (鳥飼 1997) がある。

各大学によって、指導目的や対象となる学生の習熟度も異なるため、実際そこで展開されている授業や指導方法は多様である。各大学で、誰が、どのような指導を行っているのかわかっている機会が少なく、担当教員間の基本的な情報交換の場さえ限られているといえる。通訳クラスをどのように運営していくべきか、授業内容をはじめ、評価法、使用教材、クラス編成についてさえも、議論や検証すべき点が山積しているのが現状であろう (Tanaka & Tsuruta, 2001)。

TANAKA Miyuki, "Current Pedagogical Issues in Teaching Interpreting at the Undergraduate Level."

Interpretation Studies, No. 4, December 2004, Pages 63-82

(c) 2004 by the Japan Association for Interpretation Studies

本稿は、筆者が平成7年度から教えている大学での通訳クラスの授業の実践報告である。ここで紹介する例は、平成16年度の前期(4月～7月)に担当したクラスのものである。授業の実際を詳細に紹介するとともに、授業開始前に実施した学生のニーズ調査、および授業終了後に実施したアンケート調査の分析結果を通じて浮き彫りになった、大学での通訳教育が抱える問題、そしてその対処法について検討する。

2. 授業の概要

2.1 クラスと指導目的について

今回紹介する実践例は、4年生女子大学の文学部英文学科で、2004年度前期(4月16日～7月16日)の専門科目の一つとして行った「日英言語コミュニケーション論(=英日・日英通訳法)」の授業である。約3ヶ月間に渡り、毎週1回90分の授業を計14回行った。この授業は、初めて通訳クラスを受講する学生を対象としている。指導目的は以下の通りである。

- 通訳という仕事と、通訳者への理解を深めてもらうこと
- 「通訳訓練法」を利用して語学力の強化をはかること¹⁾

2.2 受講者の構成

受講者は40名で、内訳は文学部(英文学科)27名、国際交流学部(国際交流学科)12名、音楽学部(器楽学科)1名であった。また学年は、2年生16名、3年生21名、4年生3名であった。履修希望者が定員数を上回ったため、開講時に履修希望者全員にTOEICのリスニング部門のテストを実施し、その結果と過去に受験したTOEFLのスコアに基づいて40名を選抜した。選抜された学生のTOEICリスニング部門の正解率は33%～93%で、平均正解率は69%であった。またTOEFLスコアは440点～560点で、平均スコアは490点前後であった。²⁾

2.3 授業内容

2.3.1 通訳概論

授業は「通訳概論についての講義」と、通訳訓練法を利用した「語学トレーニング」の2部構成とし、毎回、授業の前半に講義を、後半に語学トレーニングを実施した。今回講義で取り上げたおもなトピックスとサブテーマは以下の通りである。

- 通訳とはどんな作業であるか
- 通訳の歴史について
- 通訳と翻訳
- 通訳作業、業務について
- 「意味」を説明するとは？
- いつ頃から始まったのか、日本では？
- 共通点、異なる点
- 多様な通訳形態と仕事内容

- 通訳者に要求される能力とは - 適性、語学力、体力、背景知識
- 異文化間コミュニケーション - 誤解、摩擦の中での「他者」と「私」

毎回少しずつ上記のトピックスに関する講義を行ったうえで質疑応答の時間を取り、学生たちの疑問に応えた。また、学期中数回に渡って、これらのトピックスやサブテーマに基づいて討議や意見発表をグループやクラス単位で実施した。

さらに課題として、通訳、翻訳や異文化間コミュニケーションに関する書籍を一冊学生に選択させ、それを読んだうえで a) 通訳者に求められているもの、b) 異文化間コミュニケーションで通訳者の果たす役割について、の2点について英文レポートをまとめ、学期末に提出することを義務づけた。学生たちが選んだ書籍は以下の通りである。

表1 受講生が選んだ書籍のリスト

書籍名	著者	出版社
通訳という仕事	原 不二子	Japan Times
入門 - 通訳を仕事にしたい人の本	遠山 豊子	中経出版
歴史を変えた誤訳	鳥飼 玖美子	新潮 OH!文庫
通訳の現場から	柘原 誠子	朝日出版社
ボランティア英語のすすめ	篠田 顕子 新崎 隆子	はまの出版
英語は女を変える - 同時通訳者が見た コミュニケーションの不思議	篠田 顕子 新崎 隆子	はまの出版
言葉の落とし穴	西山 千	DHC 出版
不実な美女か貞淑な醜女か	米原 万理	新潮文庫
魔女の1ダース	米原 万理	新潮文庫
電話通訳 - 息づかいから感じる日米文化 比較	スーザン 小山	現代書館
通訳のジレンマ - 通訳になりたい人と通訳 を雇いたい人のためのコミュニケーション論	水野 真木子	日本図書刊行会
通訳席から世界が見える	新崎 隆子	筑摩書房
放送通訳の世界	BS 放送通訳 グループ	アルク新書
パーネ・アモーレ - イタリア語通訳奮闘記	田丸 公美子	文芸春秋
同時通訳おもしろ話	西山千・松本道弘	講談社プラスアルファ新書
韓国語通訳 - ことばと心のハーモニー	崔愛子	東方出版

2.3.2 通訳トレーニング

授業の後半は「通訳訓練法」を利用したさまざまな語学トレーニングを毎回実施した。今回、授業中に行ったおもなトレーニングは以下の通りである。

- (授業で取り扱った内容に関する) 背景知識の収集・発表
- 訳語の確認、発音練習
- 語句のクイック・リスポンス練習
- 聞き読み
- プロソディ・シャドーイング
- サイト・トランスレーション
- 逐次通訳練習
- プロソディ分析

上記の練習のうち、背景知識の収集・発表、訳語の確認、発音練習、語句のクイック・リスポンス練習、聞き読み、逐次通訳練習は、授業の進行状況にあわせ、隔週 1 回のペースで行った。

一方、プロソディ・シャドーイングとサイト・トランスレーション(以後、サイトラと略す)は毎回欠かさず、それぞれ 10 分～15 分程度の時間をとってペア練習を中心に行った。なお プロソディ分析は作業に時間がかかるため、課題として提出し、授業時はチェックのみを行うに留めた。

2.4 使用教材

2.4.1 テキストについて

この授業で使用したおもなテキストは、『通訳トレーニングコース』(水野真木子・鍵村和子共著)と『「はじめてのシャドーイング」』(鳥飼玖美子監修、玉井健・染谷泰正・田中深雪・鶴田知佳子・西村友美共著)である。また補助教材として、「リスニングに生かす通訳の訓練メソッド」(雑誌「CURRENT ENGLISH」2002・4 月～2003・3 月号連載分、田中深雪著)を用いた。

2.4.2 教材選定の基準

このクラスでは、初めて通訳訓練法を使用した練習を行う学生が対象のため、テキストや音声教材の選定にあたっては以下の点に配慮した。

- 使用されている英語のレベル(語句、構文、話の展開など)
- 内容(トピックス、学習者の関心・知的レベルに適した内容など)
- 音声教材(録音状況、スピード、発音の明瞭さ、スクリプトの有無など)

2.5 評価について

学生の語学力の変化を知るため、学期中、以下の活動を実施し、評価の際のおもな判断材料として利用した。

- TOEIC テスト(リスニング・セクションのみ)
初回と最終回に実施し、正解率を比較
- 初見でのシャドーイングとサイトラ
学期中 4 回(毎月 1 回)録音・提出
(使用教材例 = 参考資料 1 (p. 81) 参照)
- 音声教材のプロソディ分析
学期中 4 回(毎月 1 回)記述・提出
(課題例 = 参考資料 2 (p. 82) 参照)
- シャドーイングと日→英、英→日の逐次通訳 1 題ずつ
期末テストとして実施
(出題問題例 = 参考資料 3 (p. 82) 参照)

評価に際して注目したのは、学生のリスニング能力、スピーキング力(プロソディを中心に)、文法の正確さ、語彙力(日本語も含む)、訳出力(正確さ、スピード)などである。また学生自身が自分の語学力の変化を自覚するように、シャドーイング、サイトラ練習を録音し、それを自分でモニターして、練習を行う中で生じた問題点や気づいた点などをスタディー・メモ(学習記録表)に記録しておくよう指示した。

3. 学生の反応

学生の反応を知る手がかりとして、授業の開始時に「ニーズ調査」を行い、受講動機などをあらかじめ尋ねた。また学期中は、できるだけスタディー・メモへの記述を奨励し、学生の反応を多方面から把握することに努めた。さらに、学生が通訳訓練法の練習をやってみてどのような感想を持ったかを知るため、最終授業時に「アンケート」を実施した。

3.1 ニーズ調査

学生たちがどのような動機でこのクラスへの受講を希望したのか、またこの授業で特に知りたい点は何なのかを知るため、初回の授業でアンケート調査(無記名)を行った。ここで尋ねたおもな点は以下の通りである。

3.1.1 授業選択の動機について

まず学生たちにこの授業の履修を選択した動機を尋ねた。その結果、40 名中 42.5%の学生が、「通訳や通訳について学びたいので」をその理由として挙げた。また 40%の学生は

「英語の力を伸ばして行きたいから」と答え、特にリスニングの力を付けたいと答えた学生がその半数を占めた。一方、「他の選択肢がないから」といった理由で履修を決めた学生も10%いた(図 1, p. 77)。

3.1.2 授業で特に知りたい点について

次にこの授業で特に知りたい点について尋ねたところ、40名中、27.5%の学生が、「どうしても通訳になれるのか、またどんな活躍をしているのか」が知りたいと述べた。また20%の学生は、「通訳者の英語の習得方法を知りたい」と答え、その中でもリスニングの力を付ける方法を知りたいとした学生が半数を占めた。さらに、「英語から日本語、日本語から英語への訳し方の手法を知りたい」とした学生が12.5%いたが、その他の学生は「分からない」あるいは「ない」としていた(図 2, p.77)。

3.2. スタディー・メモ

学期中、数回に渡って通訳訓練法の練習を行ってみてどう思ったのか、感想、疑問点、難しい点、日頃の学習状況、反省点などをスタディー・メモ(日付、記入欄のみの簡易表)に記入させるようにした。自由記述方式をとったため、書かれた内容は多岐に渡り、すべてを集約することは困難なため、学期開始直後、中盤、後半での代表的な意見を比較してみた。

まず学期開始直後に目立つ記述は、通訳訓練法に初めて接してみて「驚いた」、「難しかった」、「戸惑った」といった感想である。この時期のメモには「こんなに出来ないとは思わなかった」、「自分が不甲斐ない」、「今後、皆についていけるかどうか不安だ」など、かなり悲観的な記述が目立っている。また、うまく出来ないのは「練習不足」、「集中力の欠如」、「リスニング力の不足」、「読む速度が遅い」、「メモが取れない」などが理由ではないかと書いている学生が多い。

授業が中盤に入った5月、6月頃には、「少し落ち着いて対処できるようになった」、「僅かながら進歩したと思う」などの肯定的な感想がある一方で「(自分のシャドーイングの録音テープを聞いて)一本調子で、お経みたいだ」、「日本人らしい発音になってしまう」のように否定的な感想もある。

授業も後半に入り、学期末が近づいた頃になると「やっているうちに改善された」、「上手くできなくて悔しい」、「初めに比べるとかなり向上した」といった感想や、自分の欠点を分析して「語彙力の不足」、「声に出す練習が足りない」、「もっと流暢になりたい」など自省や今後の希望を書いている学生が増えている。このように、時間の経過と共に学生の意見に変化が生じているのが、スタディー・メモを通じて明らかとなった。

3.3 授業終了後のアンケート調査

最終授業時に、学生たちの感想を知るためアンケート調査を実施した。このアンケートで

は、特に学期中繰り返し行ったシャドーイング、サイトラ、逐次通訳などの通訳訓練法に対して学生がどのような感想を持ったかということを中心に尋ねた。なお、このアンケートは無記名で、成績とは何ら関係がないことを用紙に明記した上で実施した。

3.3.1 シャドーイング練習について

まず初めに学生たちにシャドーイングの経験について尋ねたところ、「この授業で初めて知った」との答えが71.4%を占めた。一方、「この授業を取る以前から知っていた」学生では、「大学の他の授業で習った」学生が11.4%、「高校時代に習った学生」が8.6%、「ラジオ講座を通して知った」学生が5.7%、「語学学校で習った学生」が2.9%いた(図3, p. 77)。「大学の他の授業で習った」と答えた学生たちに、どの教員から習ったのかを尋ねたところ、筆者から他の英語の授業の際に習ったということが明らかになった。全体として、シャドーイングを知らない学生が大半を占めたのは少し意外であった。

次に、シャドーイング練習をやってみてどう思ったのかを尋ねたところ、「とても難しかった」と答えた学生が34.3%を占め、「やや難しかった」とした65.7%の学生とあわせて、程度の差はあれども、履修者全員がシャドーイングは難しいと感じていたことが判明した(図4, p. 78)。

では、学生たちはシャドーイング練習のどんなところに難しさを感じているのだろうか。その理由は一つではないと予想されたため、複数回答可で尋ねたところ、71.4%の学生が、シャドーイング練習の大きな特徴である「聞きながら話すこと」に難しさを感じたと回答した。それについて、「正確に声に出すこと」に対して難しさを感じたという学生たちが40.0%もいた。また、音声の「スピードについていくこと」に対しては31.4%が、「英語を聞き取ること」に対しては25.7%の学生が難しいと回答した(図5, p. 78)。

学期中は、LL機材を用いたペア練習の形で、毎回10～15分程度シャドーイング練習の時間を取ったが、課外学習に関しては指示を行わず、学生に自主的に行って欲しいとの教員側の希望を伝えただけであった。その結果、「ほぼ毎日練習していた」という学生はわずか2.9%しかいなかったが、「週2～3回は練習していた」という学生になると、45.7%いた。しかしその一方で、「授業でしかやっていない」という学生は34.3%で、「試験の前だけやった」という学生も17.1%いた(図6, p. 78)。

このデータを、先程の「シャドーイング練習について」のデータと比較してみると、週2,3回以上練習している学生の中で「シャドーイング練習は大変難しい」と答えている学生は41.6%であるが、授業時のみしかやっていない学生ではこれが58.3%に増える。練習時間が増えると、練習を難しく感じる割合が減る傾向が顕著に見られる。

では、シャドーイング練習を行ってみて、学生たちはどんな効果があったと思っているのだろうか。この質問も複数回答可の形式で行ったところ、一番多かった答えがプロソディに関するもので、「英語の発音やアクセントに対して気を配るようになった」点を指摘した学生が62.9%いた。またリスニングに関しても同様に多くの学生が指摘し、「英語が少しは聞き

取りやすくなったように思う」が60%いた。さらに、「英語のスピードに少しはついていけるようになった」点を挙げた学生は45.7%いた。一方、「英語を話す速さに変化があった」、「英語を声に出して話すことに対して抵抗が減った」、「英語の発音が良くなったような気がする」はそれぞれ14.3%と少なかった(図7, p. 79)。

学期中4回に渡って使用テキストの音声教材のプロソディ分析を課外学習の形で実施したが、それについて学生たちは、全員何らかの役に立ったと答えた。これも複数回答可で調べたところ、「英語の音の特徴を把握するのに役に立った」とする学生が最も多く、54.3%、「意味のかたまり(チャンク)を把握するのに役に立った」とする学生が51.4%いた。一方、「プロソディ記号の使い方」や「アクセントの位置の把握」が難しかったと感じた学生も17.1%ずついた(図8, p. 79)。

3.3.2 サイトラ練習について

サイトラの練習では、「今回が初めて」という学生が79.4%で、大多数を占めた。一方、サイトラ練習の経験がある学生は合計で20.6%おり、その内8.9%は「大学で」、同じく8.9%は「予備校や塾」で、そして2.9%は「高校で習った」と回答した。「大学で習った」と答えた学生の追跡調査により、全員が筆者の担当する他の英語の授業を履修した際に筆者から習ったということが判明した(図9, p. 79)。

次に、サイトラのどんな点が難しいと思うのか尋ねてみた(複数解答可)。70.6%の学生が、「スピードについていけない」点を挙げた。次に、英文を「聞きながら話す作業」に難しさを感じた学生が、47.1%いた。また「文頭から訳す作業」に慣れていないために戸惑うとした学生も、11.7%いた(図10, p. 80)。

次に、サイトラをやって効果があったと思うかという問いに対しても(複数回答可)は、英語が「聞き取り易くなった」とした学生が一番多く、47.1%いた。また、英語の「スピードについていける」ようになったとした学生が35.3%、「文頭から英文を理解できるようになった」とした学生も同じく35.3%いた。しかし、「意味の区切れがどこにあるのか、わかるようになった」とした学生は、11.7%、さらに、「訳出のスピードが上がった」とした学生は、5.9%と少数にとどまった(図11, p. 80)。

3.3.3 逐次通訳の練習について

最後に、逐次通訳についてどう思っているのかという点のみ複数回答可で尋ねた。その結果、「聞き取りが難しかった」と「素早く書き留めることが大変」とした学生が、それぞれ55.9%いた。また、「メモの取り方がわからなかった」とした学生が、35.3%、さらには、自分が「書いたメモが読めずに訳出できず困った」とした学生も23.5%いた(図12, p. 80)。

4. 考察

上記のニーズ調査とスタディー・メモ、アンケート調査を通じて初めに感じたことは、学生

たちが、通訳訓練法を利用した練習のあらゆる段階で躓いており、また躓きの理由も多岐に渡っているということであった。ここでは、今回の授業で特に力をいれて練習したシャドーイング、サイトラ、逐次通訳の練習における学生たちの躓きを取り上げ、その原因を考察する。

4.1 シャドーイング練習の場合

シャドーイング練習では、聞いたものをほんの少し遅れて、そのまま声に出して再生することを要求される。ここでは「英語を聞き取る力(インプット)」、「理解力」、それに「正確に再生する力(アウトプット)の力」が試され、そのいずれかが欠如していると練習に躓くことになる。

インプットに問題がある学生に共通していえるのは「リスニング力の不足」、「プロソディ・センソスの欠如」、「文法、構文力の不足」などで、このような学生は「内容把握力も不足」している場合が多かった。またアウトプットに問題がある学生は「復唱力の不足」、「英語を声に出すことが苦手」、「短期記憶が苦手」、さらには「母語による強い干渉」を受けている(カタカナ英語など)などの場合が多かった。このような学生はたとえインプットの段階までうまくいっても正確な再生はできない。

4.2 サイトラ練習の場合

サイトラ練習では、学生たちが中学校や高校の英語の授業で習った英文読解法とは異なり、文頭から訳出を行う。しかしこの訳出方法に馴染みがないため、かえって読み取りに時間がかかってしまい、練習に躓いてしまうというケースがかなり見受けられた。さらに「速読・速訳練習を行った経験が乏しい」学生の場合は、訳出までの時間がかかりかかる傾向が顕著であった。また「語彙力や構文把握力の不足」、「コロケーションの知識の不足」、「集中力不足」、「聞きながら訳す作業ができない」などの理由で躓いている学生もいた。留学生や海外経験が長い帰国子女の中には、日本語の表現力が不足し、「英語と日本語の混同」が起きたり、極めて「稚拙な訳出」しかできない場合もあった。

4.3 逐次通訳練習の場合

英日の逐次通訳の練習で用いた教材は、100～120ワード程度の短い分量の英文で、これを1～2回聞いて日本語に訳すよう指示した。また、日英では200字程度の和文を1回だけ聞いて英語に訳す練習を行った。

しかし、英日の場合はシャドーイング練習と同様、インプットの段階で躓き、「正確に聞き取ることができない」ため訳出に至らない学生が見受けられた。また、「メモを取る習慣が身につけてない」ためか、漠然と聞き流している学生も多く、訳出を行う段階になって「短い曖昧な訳出」しか出来ずに立ち往生するのが目立った。また日英に関しては、聞き取りに問題はなかったが、訳語の選定に手間取っていたり、日本語にこだわりすぎてぎこちない訳しができる学生が目立った。英日、日英の逐次通訳に共通していえるのは、聞き取ったことをしっかりと記憶に留めなければという気持ちが希薄で、メモが記憶の補助になっていない点である。

5. 大学の通訳クラスの抱える問題点

さて、通訳訓練法を使った練習での学生の躓きとその原因について考察してきたが、上記の例からも明らかなように、学生の「語学力の不足」は、大学の通訳クラスが抱える大きな問題の一つである。通訳クラスの抱える問題は多岐に渡るが、ここではその中のいくつか顕著な問題を取りあげ、一教員としてどう対処することができるのかという点を考えてみたい。

5.1 学力不足の問題

最近、一部の大学では通訳クラスに限らず、一般の英語のクラスにおいても学生の英語力の不足は深刻な問題となってきた。多くの通訳クラスでは、専門的な「通訳技術」の指導に重点を置くのではなく、通訳訓練法を利用した「語学学習」を中心としてはいるものの、通訳クラスでは一般の英語のクラス以上の英語力が要求される。基本的な英語運用能力さえ身につけていない学生にとって授業が難しく感じられるのは否めない。

ではこの問題に対して教員はどう対処していけばよいのであろうか。まずは、学生が履修を決定する以前に、クラスについての詳しい情報を提供しておくことであろう。大半の学生にとって「通訳」は馴染みがない世界で、詳しい知識を持ち合わせている学生は少ない。中には「通訳クラスを履修さえすれば通訳者になれる」といった安直な考えを持っている学生もいる。教員は授業指針をできるだけ明確にし、学生に授業内容や履修していく上で必要となる語学レベル、学習量などを周知させ、自信とやる気を持って授業に参加することが出来るよう、出来るだけの働きかけを行うことが必要であろう。

また授業内容に関しても、学生の習熟度を十分考慮し、使用する教材や練習の方法などにも工夫を凝らし、学生が自分の意志で学習を続ける気持ちを持つことができるよう、学習環境を整えてやることも必要であろう。さらには通訳訓練法を一般の英語教育の中に取り込み、他の英語科目と連携しながら利用するなどの方策も、もっと積極的に推進すべきであろう。

5.2 練習目的・方法などの問題点

通訳教育に限らず、いかなる語学学習においても「どんな語学学習を行うのか」、また「いかなる効果が期待できるのか」といった点を十分に理解し、与えられた練習が自分たちの語学向上に役に立つと判断することによって、学習者の自発的な学習意欲を促すことが可能となる (Barnes 1992)。

学生たちにとって、通訳訓練法は初めて接する練習方法である。戸惑いや不安を感じるのも当然である。それを少しでも軽減するため、導入にあたっては、まず通訳訓練法とは何であるのか、またどんな目的で利用することができるのか、どんな力を鍛えることができるのかといった点を、ひとつひとつ明らかにし、不明な点を作らないようにしなければならない。特に通訳訓練法名は、カタカナ表記が多く、文字を見ただけでは何なのか分かりづらいと言う声が多い。

このような問題に対して、本クラスでは通訳訓練法を解説するにあたって、以下のような

一覧表(表 2、表 3)を作成し、学生の理解の一助とした。このような表が学生の役に立ったか否かという点については定かではない。しかし、上述(3.2)のスタディー・メモの中には、このような表について好意的なコメントを書いている学生が散見された。

表 2 通訳訓練法の主な利用目的

	聞く力を 伸ばす	話す力を 伸ばす	読む力を 伸ばす	書く力を 伸ばす
クイック・レスポンス				
ディクテーション				
シャドーイング				
リプロダクション				
サマライジング	(聞いて行う)	(口頭で行う)	(読んで行う)	(書いて行う)
パラフレージング	(聞いて行う)	(口頭で行う)	(読んで行う)	(書いて行う)
スラッシュ・リーディング				
スラッシュ・リスニング				
サイトラ				

利用価値大 利用可能

表 3 通訳訓練法で鍛えることができるのは？³⁾

	集中 力	復 唱 力	記 憶 力	発 音	表 現 力	訳 出 力	内 把 容 握 力
クイック・レスポンス							
ディクテーション							
シャドーイング							
リプロダクション							
サマライジング							
パラフレージング							
スラッシュ・リーディング							
スラッシュ・リスニング							
サイトラ							

大いに効果が期待できる 一定の効果が期待できる

集中力：特にリスニングに際しての集中力などを指す。

復唱力：聞き取ったものを正確に口頭で復唱する力などを指す。

記憶力：聞き取った内容、読みとった内容を一時的に記憶に保持する力などを指す。

発音：発音、アクセント、イントネーション、リズムなど音声面での正確さを指す。

表現力：幅広く英語で表現する能力などを指す。

訳出力：英訳、和訳を瞬時に的確に行う力などを指す。

内容把握力：話しの論旨を的確に把握する力などを指す。

5.3 使用教材・IT導入についての問題点

通訳訓練法でどんな教材を利用すれば良いのか明確な判断基準がない中、どの教員にとっても使用教材の選択は何かと頭が痛い問題であろう。教材は学生の習熟度に応じて、ある程度幅を持たせた上で、さまざまな分野から数多く揃えておく必要がある。特に通訳訓練法に初めて触れる学生に対しては、恐怖心を抱かせないよう細心の注意が必要であろう。できるだけ、オーセンティックな素材を利用したいと思っても、教材のスピードが速すぎたり、内容が難しい場合は、敢えて練習用に加工した教材を使う方が望ましい場合もある。また音声教材だけでなく、DVD やビデオ、インターネットの映像配信など、音と映像を積極的に活用していくことも欠かせないが、費用や備品の面など、一教員の努力だけではカバーできないこともある。

また語学学習においては、週一度 90 分の授業時間だけでは、何年やっても目覚ましい上達は望めない (Lightbown & Spada, 1997)。学生が自発的に、しかも効率良く学習を継続して行くには、授業だけでなく、ランゲージラボ内での自習環境の整備、サポート・システムの構築など周辺の学習環境の態勢を整える必要がある。

さらに使用教室も、今後は従来の LL 教室設備だけでは十分とは言い難い。インターネットからのコンテンツをリアルタイムで常時利用できる PC 教室や、多様なソフトが使用可能な CALL 教室など、IT 技術の力を駆使することによって、今まで技術的に出来なかった練習も可能となる。しかし通訳クラスに限らず、どの外国語教育においても、CALL 用の教材やソフトの開発など授業に IT を盛り込むには、相応の習熟期間と準備が必要である (宮添 2004)。それにあわせて生じる教育現場、学習者、IT 間の整備をどうするのかといった点も、今後、通訳クラスを指導していく上で対処しなければならない重要な課題となるであろう。

6. まとめ

以上、大学での通訳クラスの授業の実際とそれが抱える問題と対処法について述べた。このように幾多の問題を抱える通訳クラスではあるが、今後さらなる発展を遂げることが出来るか否かの鍵の一つは「教員」が握っているといえるだろう。現在、大学で通訳クラスを担当している教員の多くは、通訳者としての経歴を持つ人が主である。実際に通訳養成期間で学び、通訳者として「現場」に立った経験は、学生を指導して行く上で代え難いものである。また学生にとっても経験豊富な通訳者から直接学ぶことが出来るのは、貴重な経験であろう。

しかし本稿で述べたように、現在の日本の大学の通訳クラスでは、「通訳者になるためのノウハウ」ではなく、「語学力向上のノウハウ」を求められることの方が増えてきている。またそれに加えて、大学では学生のレベル分けや履修者数に関してもさまざまな制約があり、マルチレベルのクラスや、100名を超すクラスで教えなければならないこともある。

また最近では、アジアや中南米諸国からの留学生の数が増え、英語を母語としないこれらの留学生に対し、英語だけでなく、適切な日本語の指導も必要とされる。さらに彼らの母語や出身国の文化・習慣に関する知識や理解を持ち合わせていないと、十分な語学指導は難しい (Bell, 1988) こともある。

このようは状況の中で、通訳クラスを担当する教員は、単に通訳技能を持ち合わせているだけでははなはだ不十分である。今後、通訳クラスに関する研究や情報交換などを大学や教員間でどう進めて行くのか、授業指針、授業内容、教授法、教材開発、IT 技術、クラス運営能力などの技術や技量をいかに磨いていくのか、担当教員に突きつけられた課題は多いと言えよう。

筆者紹介：田中深雪 (TANAKA Miyuki) 立教大学・観光学部兼任講師、フェリス女学院大学・文学部英文学科兼任講師。日本通訳学会通訳教育分科会担当理事。コロンビア大学ティチャーズ・カレッジ修士課程修了 (MA in TESOL)。ボストン・チルドレンズ・ミュージアムの東アジア部門学芸スタッフとして展示・教育・通訳業務に従事。その後、各種会議通訳を務める。

【註】

- 1) この授業では「通訳訓練法」を通訳者としての能力や技術の向上に直接結びつけるものとして捉えるのではなく、「英語力強化法のための学習方法」として積極的に位置付け (染谷 1997)、学生の語学力強化を図るための指導手法として利用することとした。
- 2) TOEFL のスコアは学生の自己申告によるもの。
- 3) 通訳訓練法は、練習方法、取り組む期間や時間、教材のレベル、また学習者の語学の習熟度によってもその効果は異なるため、個々の通訳訓練法の効果、それに利用法に関しても議論の余地は多い。ここに挙げた表 3 は、一般的な形で訓練法を利用した場合に鍛えることができると考えられるものを便宜上示したものに過ぎない。

【参考文献】

- Barnes, D. (1992). *From communication to curriculum*. Portsmouth: Heinemann
- Bell, J. (1988). *Teaching multilevel classes in ESL*. California: Pormac Inc.
- Lightbown, P., & Spada, N. (1997). *How languages are learned*. Oxford: Oxford University Press.

- Tanaka, M., & Tsuruta, C. (2001). Teaching Language through Interpretation Training
JALT Conference Proceedings, 2001: 144-148. The Japan Association for Language Teaching.
- 宮添輝美 (2004) 「外国語教育と IT の融合を目指して - 教育現場、学習者、IT 間の葛藤をいかに克服してゆくか」 『外国語教育メディア学会 第 44 回全国研究大会発表論文集』 (pp. 269-272)
- 水野真木子、鍵村和子 (2003) 『通訳トレーニングコース』 (改訂三版) 大阪教育図書
- 染谷泰正 (1996) 「通訳訓練手法とその一般語学学習への応用について」 『通訳理論研究』第 11 号: 27-44 通訳理論研究会
- 田中深雪 (2002) 「現代通詞考(第9回)英語教育と通訳教育の接点」 『通訳・翻訳ジャーナル』 第 183 号: 108-109.
- 田中深雪 (2002-2003) 「リスニングに生かす通訳の訓練メソッド」 『時事英語 CURRENT ENGLISH』 第 57 巻第 1 号 ~ 第 12 号 研究社
- 鳥飼玖美子 (1997) 「日本における通訳教育の可能性—英語教育の動向をふまえて」 『通訳理論研究』 第 13 号: 39-52 通訳理論研究会
- 鳥飼玖美子監修 玉井健・染谷泰正・田中深雪・鶴田知佳子・西村友美 (2003) 『はじめてのシャドーイング』 学習研究社

図 1 授業選択の動機について

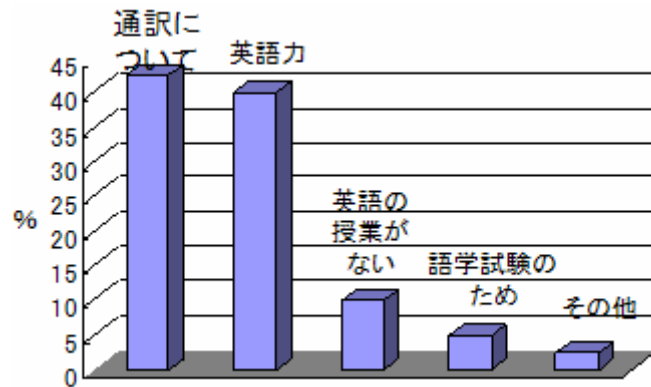


図 2 授業で特に知りたい点

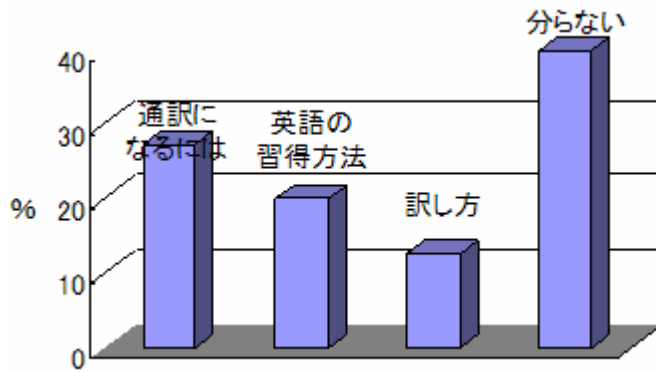
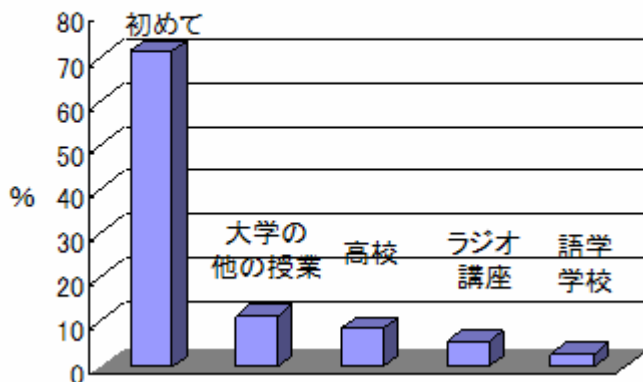
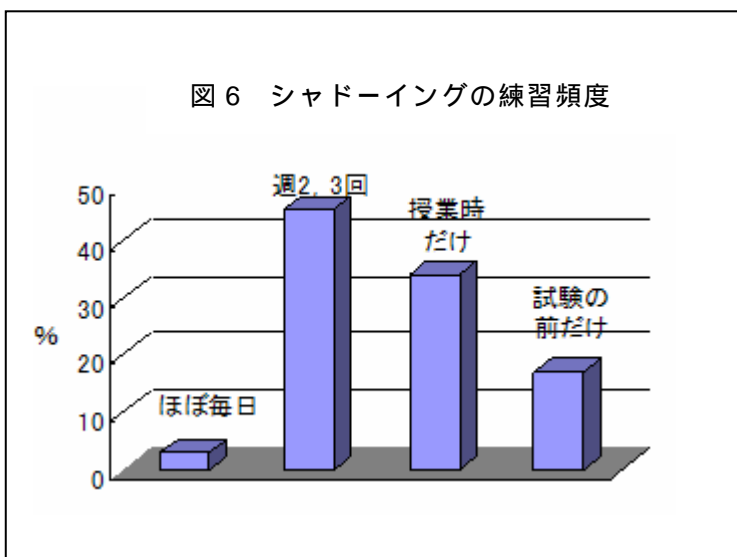
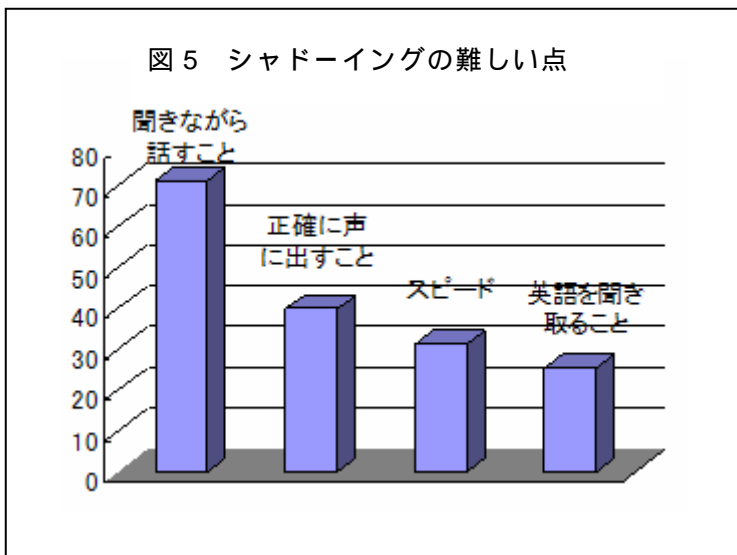
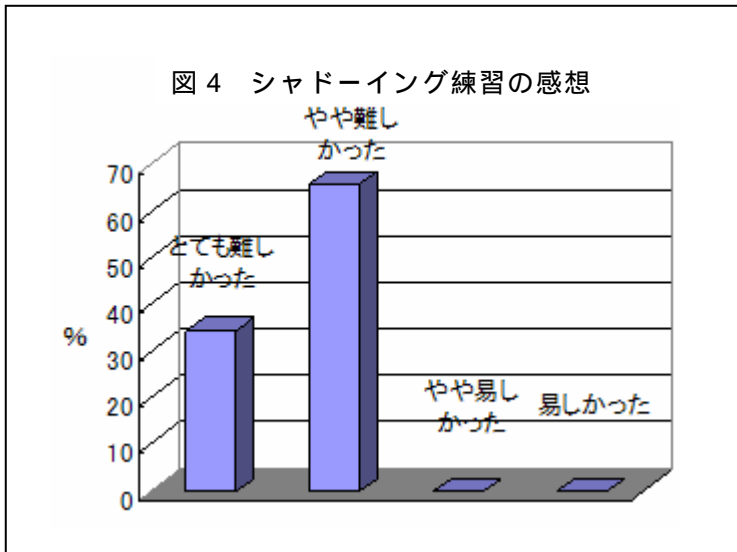


図 3 シャドーイングの練習経験





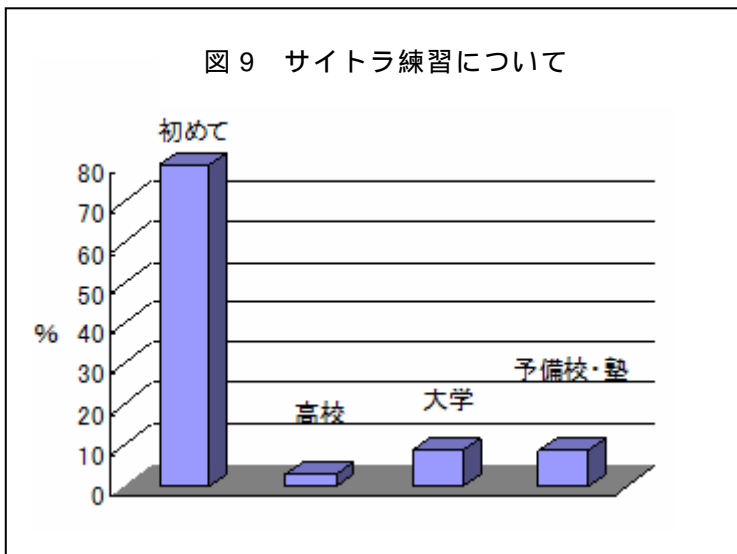
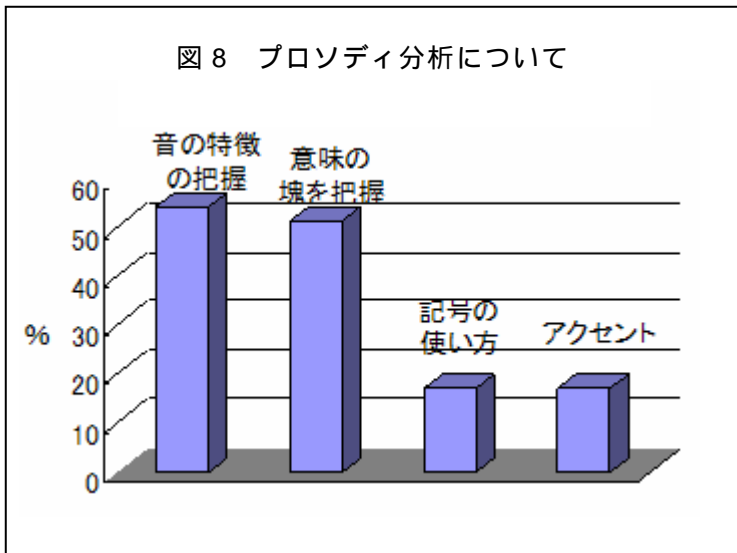
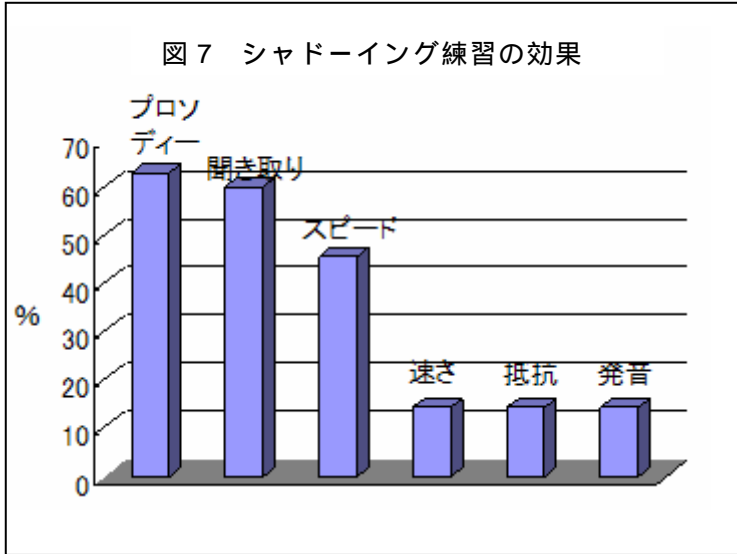


図 10 サイトラの難しい点について

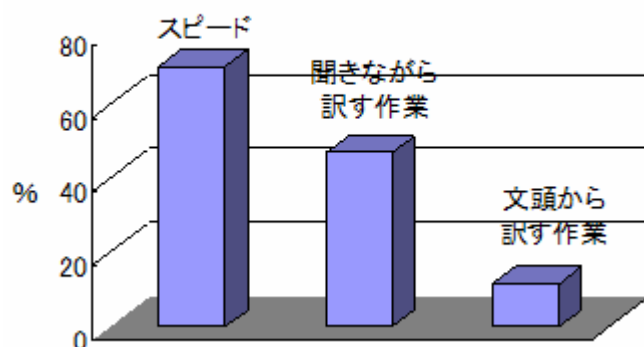


図 11 サイトラ練習の効果について

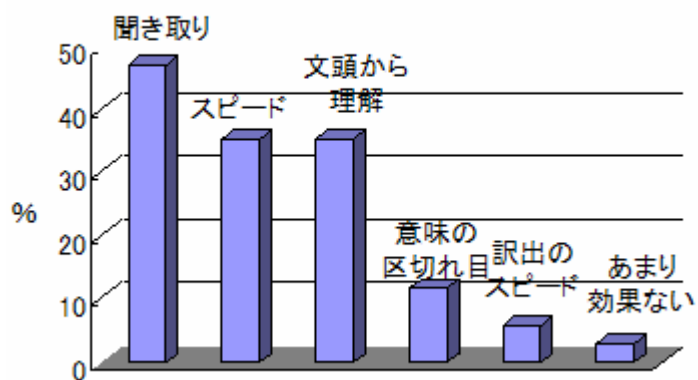
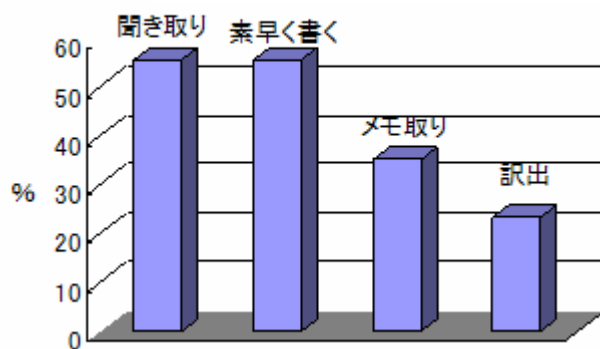


図 12 逐次通訳について



【参考資料 1】 初見でのシャドーイングとサイトラに使用した教材例

1. 初見シャドーイングの教材例 (一部抜粋)

American researchers say drinking tea may help strengthen the body's defense system against infection doctors at Brigham and Women's Hospital in Boston, Massachusetts, did the study.

The team studied a chemical found in black, green, oolong and pekoe tea. This chemical is an amino acid called L-theanine. The scientists say it may increase the strength of gamma delta T cells. That's the letter T, not the drink. Gamma delta T cells are part of the body's defenses.

First, the researchers mixed some of these cells with antigens found in the amino acid. Antigens help the body react to the infection. Then the scientists added some bacteria. Within 24 hours, the cells produced a lot of interferon, a substance that fights infection. Cells not mixed with the antigens did not produce interferon.

(出典: 『初めてのシャドーイング』 Unit 1, "Tea May Help Fight Infection" pp. 68-69)

2. 初見サイトラの教材例 (一部抜粋)

Successful aging is a term / used to describe the process of continuing to be healthy, / both physically and mentally, until one dies. //

Today we are going to look at some important keys to successful aging. //

One key is diet. //

A balanced diet with nutritious food is important for preventing heart disease.//

People tend to eat less as they get older, /

so sometimes it is necessary for older people also to take vitamins /

in order to balance their diet /

and keep their bones strong. //

Drinking a little bit of alcohol does not seem to harm the body, /

but drinking too much is not recommended. //

Not smoking is also important. //

Smoking is related to diseases of the heart and lungs. //

Education is another key. // Mental attitude plays an important role in one's health. //

Educational activities such as reading, listening to music, /

going to the theater, working with a computer, etc, /

can have a strong, positive effect on aging. //

(出典: 『通訳トレーニングコース』 Unit 6, Social Issues (1) "Successful Aging" p. 34)

【参考資料2】音声教材のプロソディ分析 課題例

- 1) 自分で録音したシャドーイングのテープを聴き、スクリプトと照らし合わせ、以下の点をチェックしてください。
 - ・ 言えなかった箇所はないか
 - ・ 言い間違えた箇所はないか
 - ・ 言い淀んだ箇所はないか
- 2) 次に教材のテープを再度聴き、スクリプトのプロソディ分析を行ってください。
(テキスト『初めてのシャドーイング』p.51 のプロソディ記号の例を参照のこと)

【参考資料3】期末試験 逐次通訳の出題例 (一部抜粋)

1) 日→英

9月15日は敬老の日です。2002年の調査によると日本では、65歳以上のお年寄りの数は、2363人で、総人口の18.5%を占め、過去最高を記録しました。高齢化社会においては、うまく年を取ること、つまり肉体的にも精神的にも健康であり続けることが、一人一人にとって重要な課題です。

(出典：『通訳トレーニングコース』Unit 6, p. 36. Social Issues (1) "Successful Aging")

2) 英→日

We come across a text or a document in a language we don't understand and we need a translation right away. It doesn't have to be a polished, perfect translation (which would be nice), but it must be good enough to convey meaning accurately in sentences that sound like English.

At least since 1954, when machine translation was publicly demonstrated by IBM and Georgetown University, we have been regularly told that automatic translation by computer was just around the corner. Alas, a computer that can do that remains as difficult to find as a smoke-free restaurant in Paris.

(出典：『CURRENT ENGLISH - リスニングに生かす通訳の訓練メソッド』
2002年11月号 p.42, "Web of tangled language")